

# 看護学における「ターミナル」「がん」 「家族」における研究動向：テキストマ イニングによる分析

昭和大学大学院  
保健医療学研究科1年  
伊藤 綾香

# 内容

1. 背景
2. 問題
3. 研究目的
4. 用語説明
5. 研究対象
6. 検索用語
7. 分析方法
8. 結果
9. 考察
10. 本研究の限界
11. 今後の発展

# 1. 背景

- がんによる死亡率は年々増加しており、日本人における約3人に1人はがんにより死亡している。
- 肺がんはがんの死因の中で第1位であり、5年相対生存率は約29%であり、ほかの部位に比べて極めて低い。  
(2000～2002年) (ほかの部位は約50～80%)

\* 5年相対生存率とは、治療でどのくらい生命を救えるかを示す割合、がんと診断された人のうち5年後に生存している人の割合が、日本人全体で5年後に生存している人の割合に比べてどのくらい低いか

## 2. 問題

- 患者本人が強く望む場合を除き、病状説明(積極的治療から症状緩和への移行時の説明)は患者よりも先に、まず家族にだけ説明(予後を含む)を行う。
- 患者本人へは家族の希望で積極的治療は行わないことを含めてすべてを告知しないことが多い。  
そのため、家族は患者との別れが近いことの悲しみを抑え、患者に気づかれないように振る舞い、さらに、本当に真実を伝えないでよかったのかと苦悩する。
- 近年、がん患者の家族に対する精神的ケアは極めて重要であると指摘されている。

### 3. 研究目的

医学中央雑誌を対象として、「ターミナル」「がん」「家族」に関する研究動向を明らかにする。

## 4. 用語説明

- ターミナルとは？

不治の病と診断され、生命予後が**6ヶ月以内**と予想される時期。

## 5. 研究対象

- 医学中央雑誌を分析の対象とした。

医学中央雑誌とは？

医学中央雑誌刊行会で「網羅的な収集」を基本方針に据え、論文情報を収集。

現在、医中誌Webには、約5,000誌から収録された約750万件もの論文情報が収録されており、国内最大級の医学文献情報データベース。

全国の医学・私学・看護系大学のほぼ100%で導入されている実績あるサービス。

## 6. 検索用語

- 検索用語は「ターミナル」で検索を行なった。

\* 本研究では、**1982年**から**2010年**までに発表された論文の書誌データを分析する。

**2011年**の文献は年度途中であり、増加する可能性が高いため、研究対象から除外する。

- 検索した総文献数  
「ターミナル」 **19.702**件

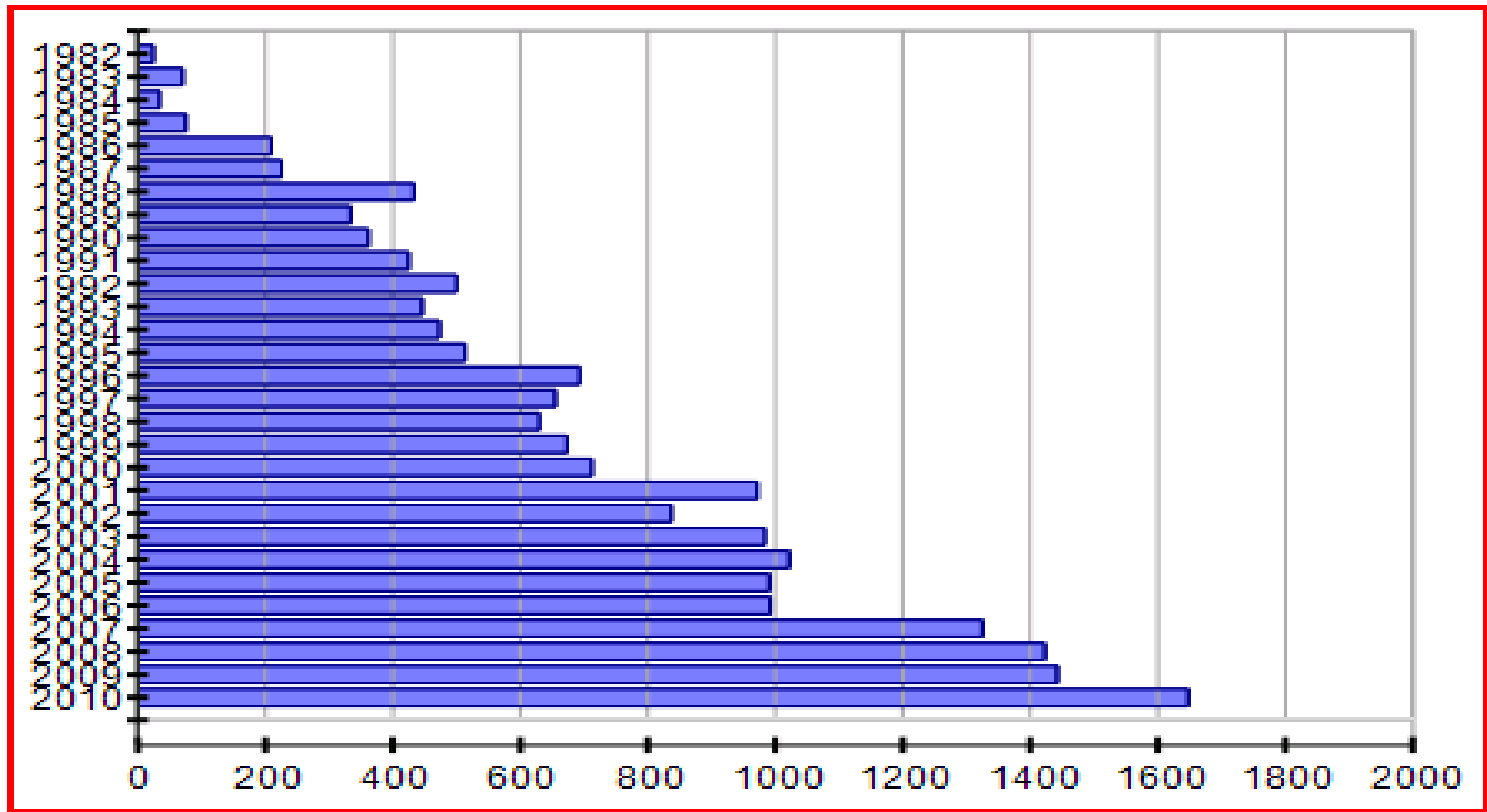


## 7. 分析方法

- 医中誌の検索結果をText Mining Studioを用いて以下の手順で分析を行う。
  - 1) 文献数
  - 2) 単語頻度分析
  - 3) 「ターミナル」「がん」「家族」に絞って文献数の分析

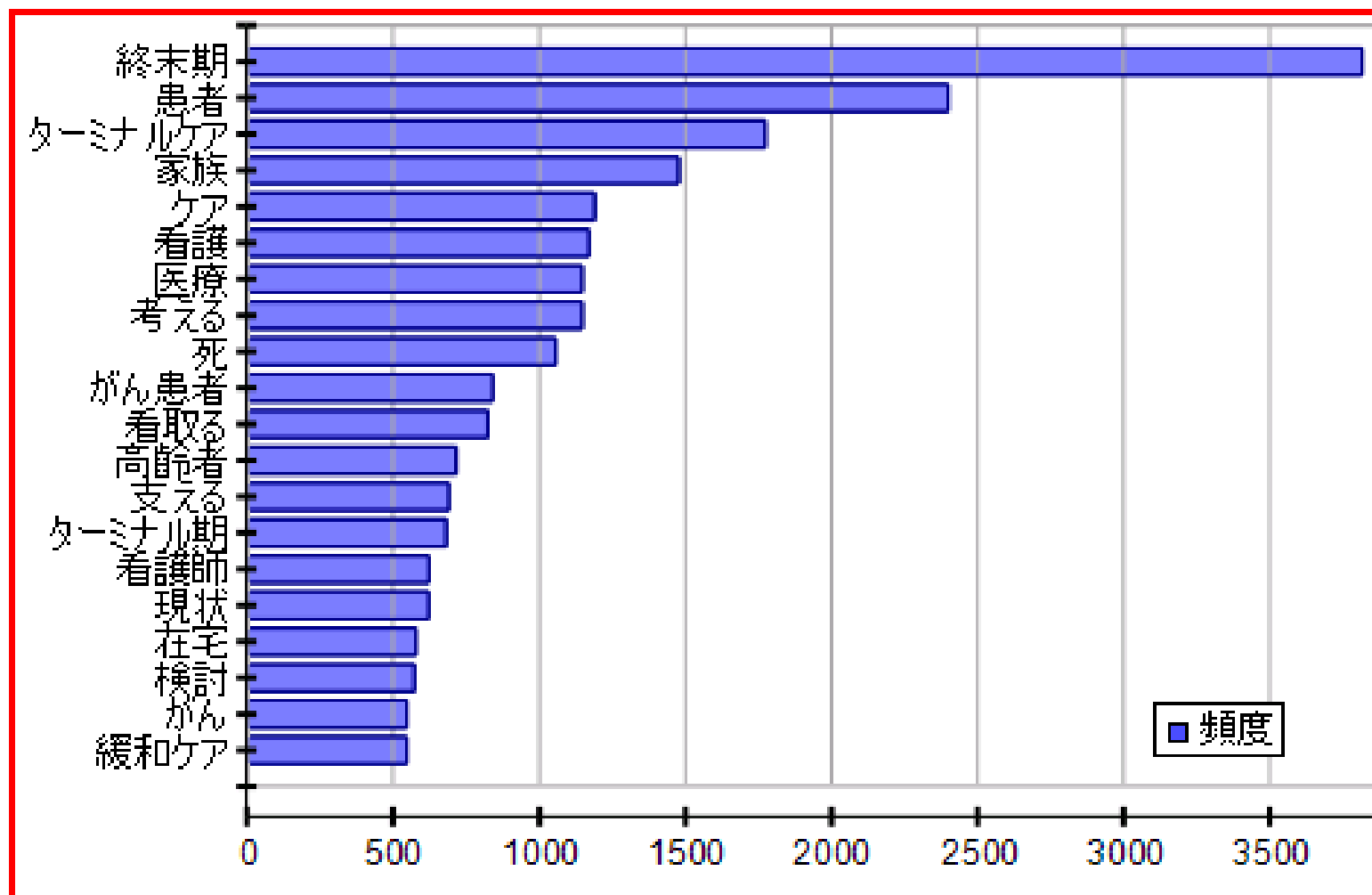
# 8. 結果

「ターミナル」の論文数



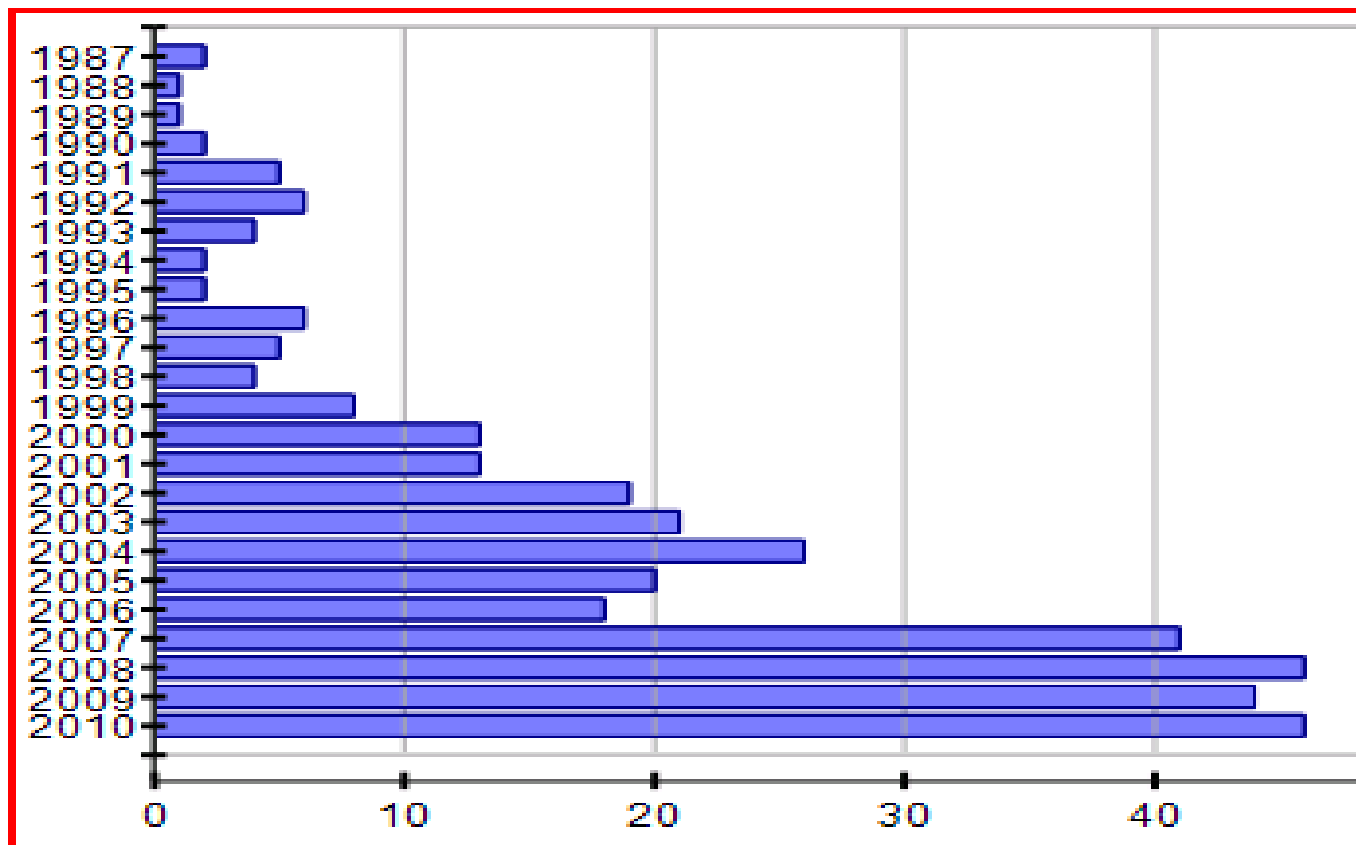
- 「ターミナル」の論文数は、年々増加している。
- **2000年と2007年に急激に増加している。**

# 「ターミナル」単語頻度分析



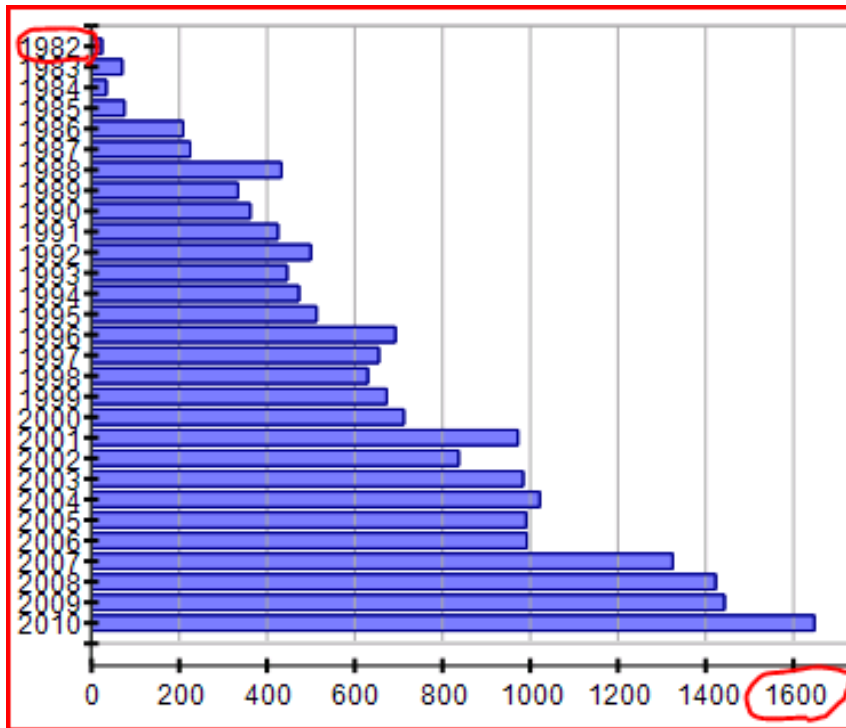
- 「ターミナル」の論文の中で、最も多く使用されている単語は「終末期」であり、ついで「患者」「ターミナルケア」「家族」であった。
- 「がん」については**547**件であり、「ターミナル」の論文の中では少ない。

# 「ターミナル」「がん」「家族」の論文数

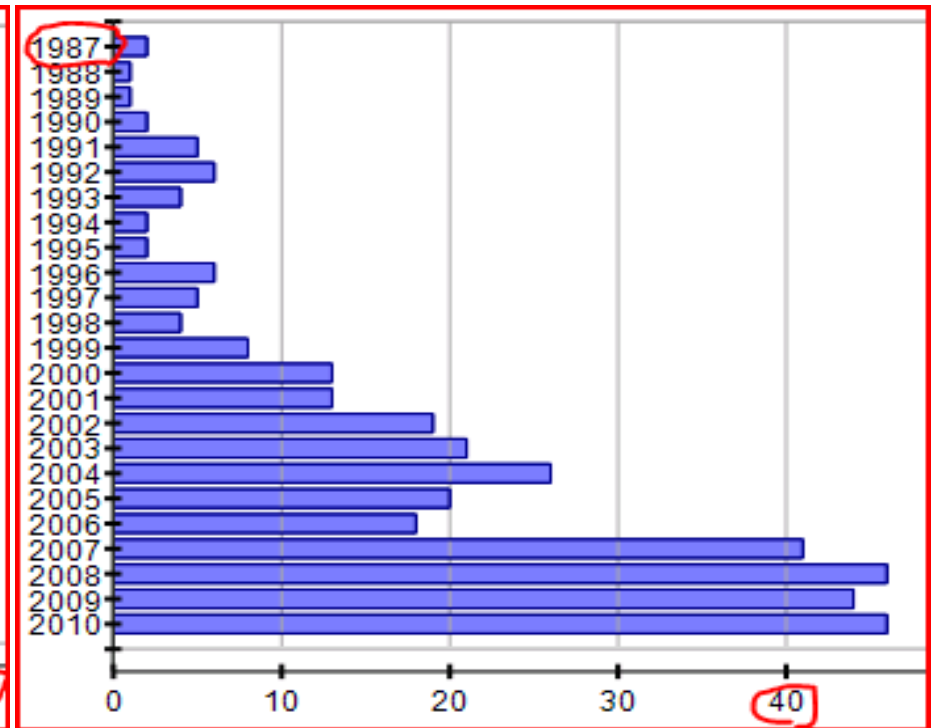


# 論文数の比較

「ターミナル」



「ターミナル」「がん」「家族」



- 「ターミナル」「がん」「家族」の論文は**1987**年から始まっている。
- **1996**年に第一の増加している。
- **1999**年までは増減を繰り返しており、「ターミナル」の論文数とは比例していない。
- **2003**年移行は**20**件を越しており、**2007**年移行は急激に増加している。「ターミナル」の論文数とほぼ比例している。



## 9. 考察

- 「ターミナル」に関する論文が年々増加していることは、「ターミナル」における関心が高まっているといえる。
- 「ターミナル」の論文のうち、「終末期」「患者」「ターミナルケア」「家族」の単語が多く使用されている。このことは、「ターミナル」で検索しているため、「ターミナル」や「ターミナルケア」「終末期」が多いのは当然であり、ターミナルケアの対象である「患者」や「家族」に関する研究が多いことがわかる。
- 「ターミナル」の論文(19,123件)のうち、「がん」に関する研究は547件と少ないことがわかった。

これは、がん以外の研究(他の疾患や事故等)に関する研究が多いことが考えられる。

- 「ターミナル」の論文が**1982**年から始まっているのに対し、「ターミナル期におけるがん患者の家族」の論文は**1987**年からと遅れて始まっている。

これは、欧米では**1970**年代以降がんが家族に与える精神的負担に関する研究が行われてきていたが、日本でも患者に関する研究に遅れて家族に対する研究も注目され始めてきたことが考えられる。

- **1996**年に「ターミナル期におけるがん患者の家族」の論文数が増加したのは、この年に第1会日本緩和医療学会が開催されたことが影響していることが考えられる。

- **2003**年以降増加しているのは、**2002**年にWHOで緩和ケアの定義が追加されたため、論文数が増えたものと考えられる。
- 「ターミナル」「ターミナル期におけるがん患者の家族」ともに**2007**年以降は急増しているが、これは、**2006**年にがん対策基本法が成立され、がんに罹患した患者と家族員にもたらす恩恵と課題を論じたことが影響し、さらに注目されるようになったと考えられる。

- 「ターミナル期におけるがん患者の家族」の論文(1987年～2010年まで)で研究種類別で見ると、と**原著論文は355件中93件と少ない**。その他は会議録や症例報告であった。このことから、「ターミナル期におけるがん患者の家族」に関する研究は必要であると認識されているが、原著論文としての研究がまだまだ少ない。

ターミナル期は生命予後が6ヶ月以内とされており、患者の状態も不安定であり、家族の精神的負担も多い時期であるため、研究にはより一層の倫理的配慮が必要であるため、原著論文数がなかなか増加しないと考えられる。

## 10. 本研究の限界

- 今回は「ターミナル」のキーワードの検索であった。そこから「がん」「家族」とフィルタリングをかけて分析を行った。他の用語でタイトルが表現されている可能性があるが、そのタイトルについては分析が行えていない。
- タイトルのみの分析であり、本文については分析を行っていないため、タイトルからは読み取れない結果がある可能性がある。

## 11. 今後の発展

- 本研究で、ターミナル期におけるがん患者の家族に関する研究が少ないことがわかった。
- しかしながら、がん患者の家族は患者と同様、精神的負担が大きく援助していく必要性が認識され、注目されてきていることがわかった。
- ターミナル期は患者の状態も不安定なため、家族の精神的動揺も大きいことが予想される。そのため、それぞれの家族に合ったより良いケアを考え、援助していく必要があると考える。

## 引用・参考文献

- 厚生労働省大臣官房統計情報部人口動態・保健統計課：平成22年度人口動態統計，2011
- 赤嶺依子，輿古田孝夫：日本看護協会第31回老人看護，p102-104，2000
- 小林未果，松嶋英介：精神科治療学，26巻7号，p871-876，2011
- 厚生労働省大臣官房統計情報部人口動態・保健統計課：平成22年度人口動態統計，2011
- 全国がん罹患モニタリング集計：2000-2002年生存率報告，独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センター
- 久松美佐子，丹羽さよ子：日本看護科学会誌，31巻1号，p58-67，2011
- 野嶋佐由美，渡辺裕子編：家族看護，6巻2号，日本看護協会出版会，p121-130